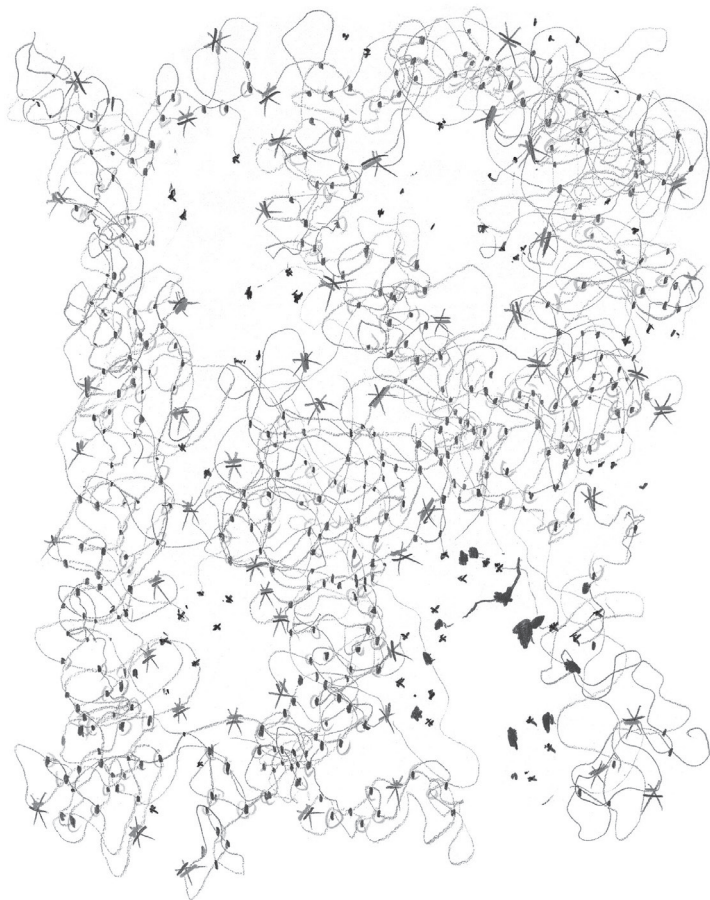


井筒俊彦

叡知の哲学

若松英輔



慶應義塾大学出版会

恵子に

井筒俊彦——叡知の哲学 目次

まえがき…………… 3

第一章 『神秘哲学』——詩人哲学者の誕生…………… II

無垢なる原点…………… II

スタゲイラの哲人と神聖なる義務…………… 27

預言する詩人…………… 34

上田光雄と柳宗悦…………… 42

第二章 イスラームとの邂逅…………… 57

セムの子——小辻節三との邂逅…………… 57

二人のタタール人…………… 71

大川周明と日本イスラームの原点…………… 76

殉教と対話——ハッラージュとマシニョン…………… 86

第三章 ロシア、夜の靈性…………… 99

文学者の使命…………… 99

見靈者と神秘詩人——ドストエフスキーとチュツチエフ…………… 111

前生を歌う詩人…………… 119

永遠のイデア…………… 129

第四章 ある同時代人と預言者伝…………… 141

宗教哲学者 諸井慶徳…………… 141

シャマニズムと神秘主義…………… 150

預言者伝…………… 162

第五章 カトリシズム…………… 175

聖人と詩人…………… 175

真理への実践——九鬼周造と吉満義彦…………… 193

キリスト者への影響——遠藤周作・井上洋治・高橋たか子…………… 202

第六章 言葉とコトバ……………211

イスラームの位置……………211

言葉と意味論……………219

講義「言語学概論」……………228

和歌の意味論……………245

第七章 天界の翻訳者……………257

コーランの翻訳……………257

「構造」と構造主義……………270

イブン・アラビー……………280

老荘と屈原……………293

第八章 エラノス——彼方での対話……………303

エラノスの「時」……………303

オットーとエリアーデ……………317

伝統学派と久遠の叡知……………329

第九章 『意識と本質』…………… 345

「意識と本質」前夜…………… 345

東洋へ…………… 354

精神的自叙伝…………… 360

「意識」と「本質」…………… 368

コトバの神秘哲学…………… 379

第十章 叡知の哲学…………… 389

仏教と深層心理学——「無」意識と無意識…………… 389

文学者の「読み」…………… 401

真実在と万有在神論——西田幾多郎と山崎弁栄…………… 417

あとがき…………… 433

引用文献一覧…………… 442

井筒俊彦年譜…………… I

井筒俊彦——叡知の哲学

まえがき

一九四三年、ある講演の冒頭で、自分は哲学者ではない、そう言ったのは井筒俊彦自身である。このとき彼は三十歳だった。

私は元来大体アラビヤ文学、ペルシヤ文学、トルコ文学というようなものが専門でありまして、それ等の文学が全部回教文学である為に、自然回教をやらなければならぬので多少研究いたしたまでであります。それ故、哲学御専攻の方々に申上ぐべきことは何も持つて居りません〔以下略〕（「回教に於ける啓示と理性」）

謙遜しているのではない。慶應義塾大学語学研究所に所属する、アラビア語およびその文学の研究者、それが当時の大学人である井筒の立場だった。だが、その一方で、彼は『アラビア思想史』、

『アラビア哲学』の二著を持ち、ムハンマド論、イブン・アラビー論も執筆していた。『神秘哲学』が刊行されたのは戦後だが、そのもととなる慶應義塾大学での講義「ギリシア神秘思想史」はすでに行われていた。業績から見れば、むしろ、彼はいわゆる哲学研究者であつたとも言えるのだ。

『神秘哲学』の中心的人物であるプラトンは、『国家』で詩人を追放した。芸術を憎んだからではない。プラトンが拒んだのは悪意ある虚構である。詩人は、啓示の通路でなくてはならない。詩人が自分を語り始めることに忙しく、天啓の伝達者という役割を忘れたとき、「共和国」から追われたのである。現代、追放されるのは詩人ではない、哲学者ではないか。『神秘哲学』を読むと、そんな著者の声が聞こえてくる。

「形而上学は形而上的体験の後に来るべきものである」と井筒は『神秘哲学』で言う。そんな彼が、詩霊の声に耳を傾けることなく、超越との繋がりを遮断した営みを「哲学」と認めていなかったとしても、また、哲学を研究しているだけで、ためらいなく「哲学者」と自称する人々と同じく、自身を哲学の徒だとは認識していなかったとしても、不思議ではない。このときすでに、彼の内心には「哲学者」は、既成の概念とは全く別な、特異の意味を有していたのである。

井筒俊彦の公生涯は、彼自身が示唆するように、大きく三期に分けることができる。

第一期は、一九四一年、処女作『アラビア思想史』から、『神秘哲学』と『ロシア的人間』の刊行、『コーラン』の翻訳を経て、海外生活に入るまでの期間。

第二期は、カナダ・モントリオールのマギル大学を皮切りに、同学のテヘラン支所、そしてイラ

ン王立哲学研究所と、海外での学際生活を過ごした時期——すなわち、一九七九年にイラン革命激化のため日本へ帰国するまでの期間である。この間、彼は、エラノス会議に深くかわり、ほとんどの論考を英文で発表している。

第三期は、日本に帰り、『イスラーム生誕』、『イスラーム哲学の原像』、『意識と本質』、『イスラーム文化』、『コーランを読む』、『意味の深みへ』、『コスモスとアンチコスモス』、『超越のことば』と次々に著作を世に問い、東洋哲学覚書の第一部『意識の形而上学』を経て、死に至るまでの期間である。彼が斃れたのは、遺作の続編の執筆を始めようとしていたときだったから、棲家を異界へ移すまで、道程は間断なく続いたと言ってよい。

当然ながら、井筒も、最初から、今日の世界的な名声から想像されるような碩学だったわけではない。哲学者井筒俊彦が誕生する過程には、幾つもの出来事があった。それはイブン・アラビーや老荘との邂逅のように、彼の内面で生じたことばかりではない。現実世界での人、あるいは思想との出会いと交わりを経て、井筒俊彦という人間から、時代を画する一人の哲学者が顕れたのである。

しかし、中央公論社版『井筒俊彦著作集』を繙いても、彼が時代をどう生きたのかを看取するのは難しい。例えば、西田幾多郎、鈴木大拙の名前すら一、二度出てくるだけで、井筒は先行者たる日本人思想家に、ほとんど触れることはなかった。井筒が日本思想に関心を示さなかったのではない。鈴木大拙への敬愛は小さくなく、著作集未収の作品からは柳宗悦の読者だったことも分かる。

西田の高弟、西谷啓治は井筒俊彦の才能をいち早く認めた人物だった。ここに大川周明や折口信夫、あるいは師である西脇順三郎の名前を加えることもできる。

彼に影響を与えたのは日本人ばかりではない。井筒は同時代人であるジャック・デリダにしばしば言及したが、おそらく彼がもっとも愛した海外の思想家はルイ・マシニョンである。影響の強さからいえば、ルドルフ・オットーとミルチャ・エリアーデも看過できない。しかし、対談を除けば、こうした師友や先学の名前すら、著作集にはほとんど登場しない。そうした空白を埋める糸口を与えてくれたのは、二〇〇九年に公刊された『読むと書く』である。

これまで井筒は、同時代史から、どこか離れたところで理解されてきたことは否めない。超然とした感のある井筒には、生前から数々の「神話」的な逸話がつきまとっていた。

井筒俊彦をイスラーム学者と呼んでも、過ちを犯したことはないが、この人物を、単に言語哲学者と呼ぶ場合と似て、窮屈な感じが残る。こうした呼称は、あまりに実相を覆い隠してはいないだろうか。彼自身は、留保なく、イスラーム学者と自称したことはないのである。

一九六七年以来、八二年まで、井筒は毎年のように、エラノス会議に参加した。一九三三年、オルガ・フレレーベ＝カプテインの企図に、ユングとルドルフ・オットーが協力し、始められた東西霊性の統合への試み、それが「エラノス」である。井筒はエラノスで、のべ十二回の講演を行うのだが、イスラーム哲学が主題として選ばれたことはない。論じられたのは、老荘と『楚辞』の思想、孔子、あるいは易について、禅、華嚴、唯識の仏教思想、インド哲学などだった。井筒の読者には

明白なように、これらの主題はそのまま『意識と本質』に流入している。エラノスに招かれていなければ、この著作は生まれなかったかもしれない。

『意識と本質』は井筒俊彦の名著である。英文著作を含めても、それは変わらない。彼は自伝を書かなかったが、『意識と本質』は、精神的自叙伝として読むこともできる。サルトルに始まり、古今集の歌人、リルケ、マラルメ、イスラームの哲人、孔子、ユダヤ教神秘主義、ユング心理学へと展開してゆくを見ると、彼と共にその思想的軌跡を追うようである。だが、この著作を、彼の精神遍歴の書として読むとき、欠けている項目があることに気がつく。キリスト教との関係である。

ある人は井筒のキリスト教論の一つとして『ロシア的人間』を挙げるかもしれない。確かに井筒はそこでドストエフスキーを「基督の証人」と呼んだ。しかし、その直後に、この人物は何よりもまず、キリスト教という一派を超脱する「新しい人」、真実の神秘家なのだと書き添えるのを忘れたかった。この著作で明らかにされているのは、文学者の相貌をまとい、危機の時代を生きた精神的革命家の境涯である。

ここで問題なのは、字義通りに直接的な、歴史的存在としてのキリスト教思想家と井筒俊彦の関係である。ある時期、井筒は、詩人クロードをはじめ、アウグスティヌス、ヨハネス・エリウゲナ、十字架のヨハネといったキリスト教思想家に強く動かされた。中でも彼が強い情感をもって論じたのがベルナルだった。これらの詩人、宗教者たちから受けた衝撃は、ギリシアの哲人との邂逅に比すべき強さで、彼の精神を貫いた。序文に明かなように、その出会いがなければ、井筒は

『神秘哲学』に着手しなかったかもしれないほど、その影響は強く、深い。

井筒俊彦の哲学的企図は『意識と本質』の副題「東洋哲学の共時的構造化」に収斂される。「共時的」とは、ある問題が、現在と同時に永遠の相の下に横たわっていることを意味する。その営みを、一個人で完遂することが不可能なことは、彼には最初から了解されていた。『イスラーム哲学の原像』において、イスラーム神秘主義を窓として、東洋哲学の深層にわけ入ろうとした彼が、「非力を痛感した」ともらしている言葉は、そのまま受け止めなくてはならない。『意識と本質』のはじめにも、この論考は「東洋哲学の共時的構造化」への序論に過ぎないと書かれている。

確かに井筒は「序論」しか書かなかった。しかし、優れた論文にしばしば見られるように、「序論」において、根本問題は明示されている。序論で終わることを承知しながらも、彼がペンをとったのは、読者の出現を信じていたからである。井筒の読者は、世界に広がっている。しかし、今、求められるのは『意識と本質』をはじめとした井筒の日本語著作を、日本人が「読む」ことではないか。未だ海外の読者の多くは、井筒の主著を知らない。彼の全貌を理解し得る可能性は、日本人にこそ開かれている。

書き手は問いかけている。読者の役割は、それを単に論評することではない。それは、書かれた言葉を深化させ、ときには書き手が思いも及ばなかった世界をそこに見つけることではないのか。書かれた文字は、動かない。しかし、秘められた意味は、読者の出現によって自ずと姿を顕す。井筒がいう創造的営為としての「読み」と、「誤読」を創造的に実践する読者の出現が作品を完成さ

せる。誤解を恐れずに言えば、作者は、その作品の全貌を知らないのである。

本論の一章から六章までは、二〇〇九年春季号から二〇一〇年秋季号まで『三田文学』に連載されたものをもとにしているが、刊行するにあたって、大きく書き改めた。七章から十章、そして年譜は、書き下ろしである。また、本書引用文中における筆者による注は、「」で記し、引用は、読みやすさを考慮し、一部を除き現代仮名遣いにした。